ちひろ美術館・東京
美術館・友の会だより

No.160

2008.9.26

生誕100年　夢と記憶の画家　茂田井武展

●2008年10月1日(水)～11月30日(日)

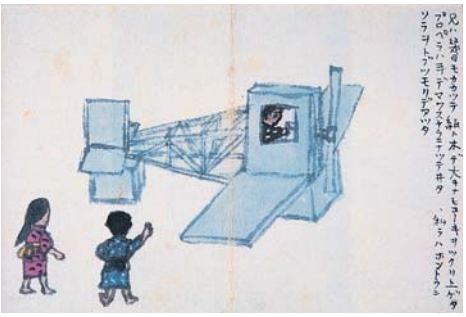


図1　「幼年画集」より　1946年
現在「幼年画集」は未完の折本3冊と、折本の断簡15枚が確認されている。
「兄は幾日もかかって紙と木で大きなヒコーキをつくり上げた
プロペラは手でまわすようになっていた
私らはほんとうにそらをとぶつもりであった」

図3　「Parisの破片」より
1930～35年ごろ
「金を入れてボタンの上に掌を置くとボタンが下から持ち上る。掌の形と深さに応じたカードが出て来る。『汝は愛情深く又勇気に富む。されど想像すべからざる苦しみと困難に出会うであろう。がついによき友を得成功する』斯んな事が大概どれにも書いてある」

図4　「続・白い十字架」より
1931～35年

図2　駄菓子屋　1947年
「駄菓子屋のおばあさんは延々として生きている　一文菓子が一厘菓子になり一銭菓子になり一円菓子になり十円菓子になり百万円菓子になろうとも駄菓子やのおばあさんは死なない」

図5　「退屈画帳」より
1937年ごろ～40年
「かれE嬢まことに親切にして菓子三銭五銭買へば必ず五厘一銭が量をわれに呉れた　われはそれを恩とした　然るに何ぞや　われはかれが苦しげなる歩行を見つつ面をそむけて不関焉の様装ふとは」

図6　土のかまど　1936年

図7　「アサノドウブツエン」より
1947年
娘のために描いた手作り絵本

図8　ホフマンのくるみわりにんぎょう　1953年
「キンダーブック」1953年12月号

図9　すてんどぐらす　1954年　「キンダーブック」1954年11月号

図10　『セロひきのゴーシュ』表紙（福音館書店）　1956年

ちひろ・旅の絵本－ヨーロッパを訪ねて－

●2008年10月1日(水)～11月30日(日)

ちひろ美術館・東京には、いわさきちひろの復元アトリエがあります。その書棚には、世界各国の歴史や文化に関する百科事典が並んでいます。ちひろは、仕事の合間にそれらを取り出しては、旅する気分で頁をめくっていました。アンデルセンの故郷、デンマークのオーデンセの頁には、ちひろが挟んだ四葉のクローバーが今も残っています。本展では、ちひろが旅したヨーロッパのスケッチと、旅の影響が感じられる絵本原画を展示します。

アンデルセンを描くために

ちひろが画家として立つ決心をしたのは、アンデルセンのお話を紙芝居に描いた28歳のときでした。以来20年近く、毎年のようにアンデルセンのお話を描きながら、新たな表現を模索していました。1963年６月、ちひろは旧ソ連訪問の機会を得て、初めて西洋の地を踏みます。「これでまたアンデルセンが描ける」と新たな意欲を持ち、旅に同行した編集者に、アンデルセンの「絵のない絵本」を描きたいと申し出ます。絵本制作に向け、ちひろは、ヨーロッパの街を「お月さまが見たように私も歩かなければ」と思い、1966年３月にヨーロッパの旅に出ます。

ちひろのヨーロッパ旅行

画家仲間が集ったこの旅に、ちひろは母と参加しました。ロンドンを振り出しにローマまで各都市を34日間で周る中、わずかな暇を見つけては、すばやくスケッチし、ホテルに戻ると水彩で色をつけました。パリへ移動する途中、ちひろは一行と別れて母と二人で、オーデンセにも立ち寄っています。みぞれまじりの天気の中、７時間ほどの滞在でしたが、十数枚のスケッチを描きました(図１)。家族へ宛てた葉書からは、この旅の大きな目的を果たした高揚感が伝わってきます（図２)。旅行中に描き溜めた５冊におよぶスケッチブックには、名所よりも、人物を描き込んだ何気ない日常の光景が多く、そこに暮らす人々に寄せたちひろの温かなまなざしが感じられます。

アンデルセンの絵本

帰国後すぐに、ちひろは鮮明な記憶をもとに、『絵のない絵本』を情感豊かに描きあげます。ヨーロッパで描いたスケッチが随所に活かされたこの作品は、月明かりに浮かび上がる幻想的な光景に確かなリアリティを与えています（図４)。

アンデルセンの生地を訪ね、その文学への理解を深めたちひろは、『にんぎょひめ』や『あかいくつ』など、アンデルセンの絵本に新たな気持ちで取り組みました。これまでと比べ、場面を説明する直接的な表現から、登場人物の内面を暗示する表現に重点が置かれるようになりました。また、実際に目で見て、肌で感じたヨーロッパの風景を背景にさりげなく織り交ぜて、物語の世界を鮮やかに浮かび上がらせています。たとえば、『あかいくつ』の表紙絵として描かれた作品の背景には、フランスのアミアン大聖堂が霧にかすむように、落ち着いた色調で描かれ、荘厳な印象を与えています(図５)。

絵本『あかいふうせん』

若い頃、映画館に通いつめたちひろにとって、パリは憧れの地でした。実際に映画に出てきた石畳を歩き、街の空気に触れてから、いつかパリを舞台にした絵本を描きたいという思いを抱いていました。編集者から、今までとは違う、ちひろらしい絵本を作るよう乞われて、ちひろは、映画「赤い風船」を絵本にしたいとこたえます。そこには、実際に訪れたパリや同名の映画のイメージと共に、「巴里祭」など1930年代のフランス映画のイメージも重ね合わされ、街の雰囲気を香り豊かに伝えています（図６)。（原島恵）

図１　オーデンセ　アンデルセンの家　1966年

図２　オーデンセから家族に宛てた葉書　1966年

図３　ローマ　猫のいる遺跡　1966年

図４　廃墟でかめを落として泣く少女
『絵のない絵本』童心社　1966年

図５　教会の前で踊るカーレン
『あかいくつ』偕成社　1968年

図６　風船と街へ出るパスカル　『あかいふうせん』偕成社　1968年

生誕100年　夢と記憶の画家　茂田井武展

●2008年10月1日(水)～11月30日(日)

後援　(社)日本国際児童図書評議会・日本児童出版美術家連盟・絵本学会・(社)全国学校図書館協議会
協力　後藤暦・広松由希子・大川美術館・貞末賢二・白井朋子・竹浪明・安和子

戦中から戦後の混乱期に子どもの本の世界で活躍した、茂田井武。友人たちから「ボヘミアン」と呼ばれた彼の絵には、あたたかなユーモアと、無限の広がりを持つ魂が息づいています。日本の絵本の隆盛期を待たずに亡くなった彼の絵に出会う機会は、現在、決して多くはありませんが、その絵を愛する人たちによって、没後も大切に保存され、さまざまな形で紹介され続けてきました。生誕100年を記念し、茂田井の画業の全貌を紹介する展覧会を開催します。

幼年の輝き

茂田井武は1908年、東京でも有数の旅館だった日本橋の「越喜」の次男として生まれました。戦後描かれた小さな未完の画帳「幼年画集」(図１)には、幼いころの印象が、透明感のある水彩画で丹念に描かれています。着物姿に前かけや学生帽の姿で描かれる幼い茂田井は、活劇映画のゴッコ遊びに興じたり、布団部屋で息をひそめてかくれんぼをしたり、友達の前で得意げにナポレオンの絵を描いてみせたりしています。

多感な中学生であった15歳のときに、生家の旅館が関東大震災で全焼し、翌年には母を亡くします。その後の波乱にとんだ人生のなかで、幼年時代の記憶が、彼にとってどれほど輝かしく、大切なものであったか――「幼年画集」の一場面一場面には、子どものときの感覚までが凝縮して描き出されていて、切ないほどの懐かしさを覚えます。

欧州の旅

父が再婚した義母と反りが合わず、美術学校の入試にも失敗した茂田井は、次第に自分の居場所を失っていきました。1930年、21歳のときに、写生旅行と称して80円を手に東京を発ち、博多からソウルへと渡ります。すぐに金は底をつき、ハルピンで働いて旅費を作り、シベリア鉄道で似顔絵描きをしながらモスクワへ、さらにワルシャワ、ベルリンを経てパリへ到着します。17区にあった日本人会の食堂で皿洗いや給仕の仕事を得た彼は、近所の子どもたちに紙芝居を作って喜ばせたり、週末には酒場に出かけて飲み明かしたりと、市井の生活にとけ込んでいきました。いわゆる画家らしい修行には背を向け、夜毎絵日記のように印象を描くというのが彼の作画スタイルでした。現存する渡欧時代の３冊の画帳「ton paris」「Parisの破片」(図３)「続・白い十字架」(図４)には、デバルカデール通りのカフェや店、近所の子どもや恋人の姿、一時滞在したジュネーブの風景、夢の断片などが描き出され、異国の人々と哀歓を共にした青年時代の日々を、今も生々しく伝えてきます。発表するあてもなく、自らの感じた美を素朴に描いたこれらの画帳は、その表現が他の美術の影響に関わりなく、内面の奥深くから引き出されたものであることを示しています。

1933年、手違いから強制送還されることになり、ロンドンからナポリ、スエズなどを経て、船賃着払いで日本に帰国します。旅の印象は、その後も画帳「古い旅の絵本」をはじめ数々の作品に描かれ、ボヘミアン的な逸話をユーモアたっぷりに記したエッセイも数多く残されています。

放浪の詩

帰国後、南京豆売りや鉄工所、呉服屋の外商、化粧品の外交販売、旅館の番頭など、30種近い職を転々とした茂田井は、27歳のときから探偵小説の雑誌「新青年」に挿絵を描くようになり、注目を集めます。「退屈画帳」(図５)は、数多くの作品でコンビを組むようになった探偵小説作家・小栗虫太郎の家に寄宿していた日々の光景を描いた画帳で、若くして病で亡くなった小栗の娘への鎮魂の思いが込められています。月の光を思わせる幻想的な青、白々とした光と、黒く不吉な影――。南支派遣軍報道部の嘱託として広東に赴いたときの印象を描いた「無精画帳」とともに、鬱屈した当時の心情が色濃く映し出されています。1940年代に入り、戦時色が強まるにつれ、「新青年」の誌面も変化し、挿絵の仕事は減っていきました。

お父さんの絵本

1942年に34歳で結婚、翌年には長女・真弓を授かった茂田井は、それまでの放浪者のような生活に区切りをつけ、画家仲間のすすめもあって、子どもの本に取り組むべく猛勉強を始めます。しかし戦争は激化し、1944年に召集されて中国に出征、北京で終戦を迎えます。

1946年１月に復員し、疎開していた家族を東京に呼び戻すと、あふれるような勢いで絵を描き出しました。当時の画題はアンデルセンやグリムの童話、子どものころの印象、おもちゃなど、童心に根ざしたものでした。描いた絵を三畳の画室の壁や襖いっぱいに貼り出し、娘をひざに抱いて、絵をみながらお話を聞かせることもあったといいます。

1947年には長男・泉が、49年には次女・暦が誕生します。３人の子どもたちは、茂田井にインスピレーションを与え続けました。描き損じの絵や反故にした紙の裏は子どもたちの絵で埋められ、日記には子どもと過ごす時間の尊さ、その愛しさが綴られています。1952年ごろから持病の喘息が悪化し、自宅療養を余儀なくされますが、童画家としての評価は高まり、命を削るようにしながらユーモアと生命力に満ちた絵を子どもの本に描き続けました。最晩年の絵本『セロひきのゴーシュ』(図10)は、病の床で筆を持つこともままならない状態で描かれたといいます。宮沢賢治の童話を見事に視覚化したこの絵本は、日本の絵本の草創期の大きな礎となり、後に続く絵本画家たちに影響を与えました。絵本を完成させた半年後の1956年11月２日、茂田井は48歳の生涯を閉じました。

茂田井は少年のころから、印象に残る光景を絵にしていたといいます。戦争の空襲で若い時代の絵の多くは焼失しましたが、記憶のなかの映像は消えることなくますます鮮明によみがえり、「その時のそのまま」の姿を再現しようと繰り返し描かれました。内面の深い部分から映し出されたその絵は、人の心の奥の、素朴で純粋な、懐かしいものを呼び覚ます。

本展では、15歳のときの自画像から、最晩年の作品まで、貴重な原画約160点と数々の資料を展示します。記憶や夢を描きとめた画帳や日記なども展示し、その人間像も紹介します。没後半世紀を超えてなお、今に生きる茂田井武の世界をご覧ください。　(上島史子)

『夢の絵本－全世界子供大会への招待状－』より　1948年　※架空社より1991年に出版
夢をもとにした長編の絵物語。生前は発表されなかった。

7月21日(祝)・8月～9月第1週までの毎週日曜日

なつ！こどもワークショップ開催

7月21日(祝)の「ロバの音楽座」ワークショップ＆コンサートを皮切りに、8月から9月1週目までの毎週日曜日に、小学生を対象とした「こどもワークショップ」が開催されました。

●7月21日(祝)
ロバの音楽座ワークショップ
「みんなでブーパクくんをつくろう」

吹くとブーッと愉快な音の出る楽器、「ブーパクくん」。材料は、牛乳パックにストローとひも、瓶の王冠などなど。見慣れたはずのものが、世界でたったひとつのすてきな楽器に早変わり！　ワークショップ終了後も、ちひろの庭で、手作り楽器でお話しをして遊ぶ子どもたちの姿がそこここに見られました。

●7月21日(祝)
ロバの音楽座「愉快なコンサート」

中世・ルネサンスの古楽器や空想楽器によるユニークなコンサート。見たことのない不思議な形の楽器や、新聞紙を使った斬新な演奏に目を丸くする子も。最後には、子どもたちがワークショップで作った楽器、「ブーパクくん」も加わって大合奏となりました。

●8月3日(日)
「積み木のラビリンス」
講師：森哲弥（彫刻家）

一人ひとりに配られた30センチ四方の四角い板には、端っこと真ん中にひとつずつ小さな穴が。これがビー玉を走らせるスタートとゴール地点。この板の上に、ゴールまでの長～い迷路を作りました。木片を使った立体的で個性的なラビリンスに、みんな大満足。

●8月10日(日)
「再生紙でつくる壁飾り」
講師：森友見子（造形作家）

水でふやかした色とりどりの紙を、素材別・色別にみんなでちぎり、水と一緒

にミキサーへ。ザルにあけて軽くしぼり、糊を加えてよく混ぜたら紙粘土のできあがり。ベニヤ板の上に、紙粘土で思い思いの形を作って、再生紙からすてきな壁飾りができました。

●8月17日(日)
「色の本をつくろう」
講師：ちひろ美術館学芸員

ちひろ独特のにじみやぼかしの説明の後、大きく切った障子紙に、みんなで筆や指を使って水彩絵の具を塗ったり、水をたらしたり。乾いたら、好きな色の組み合わせを5枚切り抜いて重ね、美しい色の本が完成。何気なく目にしている色の不思議に気づいたひとときでした。

（川口恵子）

8月1日(金)

主催：サントリー株式会社／後援：東京都港区・港区教育委員会

サントリー「水育」親子わくわく体験教室inお台場　ワークショップ参加

「水育」（みずいく）とは、サントリーが、環境への取り組みの一環として展開している、水をテーマにした小学生を対象とする体験型学習支援活動のこと。かけがえのない水について学び、水を育む自然の大切さを子どもたちに伝えよう、という活動です。

水の日の8月1日にあわせて、お台場にあるサントリービルで行われたこのイベントは、今年で3回目。ちひろ美術館では、館内でも人気のワークショップ、「ちひろの水彩画にチャレンジ！」でこのイベントに初参加しました。同時に多人数が取り組めるワークショップをと考え、水彩のにじみを切り取って台紙に貼り、しおりに仕立てて持ち帰るという手順に。刷毛で水を塗った紙に絵の具を落とし、にじみを体験、水の特性を体感してもらうことがポイントです。

水に関するクイズラリーや水の性質を利用した実験ショー、世界の水の飲み比べなど、たくさんのプログラムがあるなか、400名近い子どもたちがちひろブースに来てくれました。一時は入場制限をしなければならないほどの混雑でしたが、ブースへ来てくれた子どもたちはみな楽しそうにチャレンジしていました。絵の具が乾くまで別のブースに参加して、「そろそろ乾いたかなあ」と戻ってくる子や、「もう1回やりたい」と再度絵の具コーナーへ来る子どもも。

第1回目の2006年には約400名の参加だったそうですが、第3回目の今回は来場者数が700名をこえ、大盛況でした。

次代を担う子どもたちに、環境教育のほか、美術や音楽、スポーツなど、子どもの感受性を育てる支援プログラムを行っているサントリー。私たちが取り組んできた教育普及活動が、美術館内や学校だけではなく、他分野のプロジェクトとも連携することのできる可能性を感じた一日でした。

（阿部恵）

参考：http://suntory.jp/MIZU-IKU/

「ちひろの絵であなたも一句」選句発表

「ちひろと俳句」展（展示期間：５月14日～７月13日）の関連企画として開催された俳句イベント。６歳から92歳までの幅広い年代の方々から、1129句の応募をいただきました。多数のご参加、ありがとうございました。

なかには授業の一貫として取り組む小学校や中学校もあり、絵の前で「五・七・五」と指折り数えながら、熱心に俳句を考える子どもたちのほほえましい姿も。説明的な要素をはぶき、見る人の想像力を刺激するちひろの絵と、世界で最も短い形式の詩である俳句。新たなコラボレーションの試みから、斬新な作品が多数集まりました。

選考の結果、入選作品15句、うち各賞として松本猛賞１句、キュレーター賞２句、ちひろ美術館賞５句を決定しました。技巧的な面を重視するのではなく、「ちひろの絵と俳句のことばが響きあい、イメージの広がりを感じさせるもの」を選考基準に、入選作品と各賞を選出しました。（山田実穂）

★松本猛賞、◎キュレーター賞、○ちひろ美術館賞

①わらびを持つ少女　1972年

◎早蕨や摘む指先もやはらかく　ちさと
○大地よりぬくもり束ぬわらびかな　松野茂

②水仙とつくしを見る子ども　1960年代後半

○つくしんぼせいたかのっぽかわいいな　岩田紗奈
水仙を見ている君を見てる僕　植田井草

③猫と子どもたち　1969年

○子どもらにまじりて仔猫いっちょまえ　ふみこ

④ねぎぼうずと麦と子どもたち　1960年代半ば

ねぎぼうずチョウがとまってリボンかな　ゆうちゃん

⑤紫の雨のなかの少女　1971年

◎あぢさゐの色の染みたる小雨かな　ウメ子
この傘は私のおうち梅雨の道　しゅう
五月雨や風むらさきの匂ひして　志賀節子

⑥緑の風のなかで　1973年

○風の中透明になるわがからだ　小下美乃
名を呼ばれ振り向く我に雲の峰　夏穂
新しき風の生まるる夏帽子　まりも

講　評

★松本猛賞
（安曇野ちひろ美術館館長　松本猛）

「裸児（はだかご）の尻の白さや夏光る」
夏のまぶしい陽射しと、子どものエネルギーが絵と響きあって、元気な声が聞こえてくるようです。子どもたちの夏の世界がここにはある。ちひろもきっと、そんな思いでこの絵を描いたのでしょう。

◎キュレーター賞
（「ちひろと俳句」担当　山田実穂）

「早蕨や摘む指先もやはらかく」
早春のわらびの瑞々しさとともに、少女の柔らかな生命感をとらえたところに、新鮮な印象を覚えました。
「あぢさゐの色の染みたる小雨かな」
淡い紫色のにじみから、絵にはない紫陽花をイメージしていて、しっとりと濡れた空気や水に映る色彩が感じられます。

⑦日傘を持つ女の子と赤い帽子の男の子　1970年

★裸児の尻の白さや夏光る　みさを

⑧入道雲　1973年

○初めての夏をむかえる母として　片野あかね
老いの身に生きる力や雲の峯　風華

7月26日（土）

東京女子医科大学病院でピエゾグラフ展スタート

新宿区河田町にある東京女子医科大学総合外来棟地下１階に、ちひろのピエゾグラフ10点を展示、各フロアの授乳コーナーにも複製画を飾りました。この展示は、看護師、ソーシャルワーカー、栄養課のスタッフが所属する「子どもの目線にたった看護の提供を考える」プロジェクトチームからの申し込みにお応えして実現したもの。展示の飾りつけ作業には、プロジェクトの皆さんもお手伝いに駆けつけてくださいました。「心がなごみます」「気持ちが落ち着く」という患者さんからのコメントや、「私たちの病院に来てくれてうれしい」「患者さんとのコミュニケーションのきっかけになる」という病院スタッフからの声も届いています。また、女子医大看護学部の高校生向けオープンキャンパスの施設見学コースに、このコーナーの見学を組み込んでくださったというううれしいお知らせも。安曇野の長野県立こども病院に次いで、東京の病院施設での初めてのピエゾグラフ展となりました。（阿部恵）

東京女子医科大学スタッフの皆さんと

ひとこと ふたこと みこと

7月12日（土）
日々の忙しさに疲れた心を癒したくて、ちひろさんの絵に会いに来ました。優しい緑の庭に囲まれた美術館の建物を見るだけで、ほっとします。今年の夏は、義母が病に臥せっておりますので、義母の枕元で、ちひろさんのきれいなお花の絵本を見せてあげようと思っています。寝たきりの義母に何もしてあげられませんが、美しいものを見せてあげたいです。「入道雲」の絵が目に飛び込んできました。心にうつして帰ります。
（setubunsou）

8月6日（水）
ふと目にとまった１枚のリーフレット。安曇野に行ったことはあったのですが、出張で来たのでふらっと寄ってみました。現在、教育関係の仕事をしていますが、〝どんな子どもでも、夢を持った美しい子どもにみえてしまう〟というちひろさんの言葉にはっとさせられました。私は、自分のクラスの子どもたちの何を見ていたのか……。
「大人というものはどんなに苦労が多くても、自分の方から人を愛していける人間になること」。やさしくあったかい絵と、ちひろさんの言葉に励まされ、明日からの一歩が何だか楽しいものになりそうな予感でいっぱいです。（みい）

8月8日（金）
以前から来たかった場所に、今日やっと来ることができました。同じ東京に住んでいるのに、なかなか決心がつかず……。「思いッきりイイ!!テレビ」の特集でちひろさんの命日だと知り、思わず足を運びました。もっと早く来ればよかった。涙が出るほど、すてきでした。また来ます。　（若林香織）

8月16日（土）
初めてここの美術館に来ました。今は亡き祖母に、ちひろさんの絵について書かれた本をもらい、落ち込んだときによくその本を見ていました。淡くフワッとしたちひろさんの絵は、他の画家の描く絵から感じられるものとはまた違う魅力を感じます。また、なぜかその絵を見ていると、とても心が落ち着きます。今回この美術館でちひろさんの絵の技法を知ることができ、うれしいです。「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」という世阿弥の言葉は、本当にちひろさんの絵に生かされていると思います。　（大学２年）

美術館日記

7月24日（水）☼
毎日曜に行われる「こどもワークショップ」を中心に、この夏はイベントが目白押し。さまざまな美術館活動をいち早くお知らせしたいとホームページにブログ（日記）をスタートした。まずは７月21日開催の、ロバの音楽座のワークショップとコンサートから。写真とともに、各担当者が感じたままに綴る、もう一つの美術館日記に。

8月4日（月）☁
12月15日、ちひろの誕生日発売をめざして、いわさきちひろ生誕90周年記念DVD＋BOOK「ちひろWORLD（仮）」の制作が進められている。映像と音楽で楽しむ高画質の２枚組DVDに加え、ちひろの絵を通して子どもとの対話が楽しめるコミュニケーションカード付き。今日も長時間にわたり、収録作品選びが行われた。

8月14日（木）☼
夏休みとあって、館内にはたくさんの子どもたちの姿が。最近は友達同士で来館する中高生も多い。どうやら夏休みの宿題で訪れている様子。絵の前で熱心にメモを取ったりスケッチしたり。「ここを選んでよかった」「お気に入りの絵をみつけた」「絵がもっと好きになった」……来館者ノートにはこんな感想も。

8月16日（土）☼・☂
連日、短時間外にいるだけでも熱中症が危惧されるほどの暑さ。と思えば雲行きが一転し、突然襲ってくる局地的な豪雨。このところ〝荒々しい〟と感じるような天候が続く。今日もバリバリッと雷が鳴ったと思ったら、一瞬にして豪雨に。不安そうに、雨のおさまりを館内で待つ来館者の姿も。

8月20日（水）☁
ちひろ美術館ホームページの英語サイトを大きくリニューアル。英語・韓国語・中国語で構成されデザインも一新、楽しいページとなった。韓国の絵本関係者からもさっそく「見ましたよ」との声が寄せられた。国を超えてさまざまな方が、ちひろとちひろ美術館を知るきっかけとなればうれしい。

8月30日（土）☁・☂
相田みつをの詩・書とちひろの絵による詩画集『みんなほんもの』が本日発売となった。「親子の心をつなぐ絆シリーズ」２冊目の絵本。売上の一部はユニセフに寄付される。９月２日から相田みつを美術館で行われる刊行記念展のため、夕方、ちひろのピエゾグラフ作品が搬出された。

窓

映画『赤い風船』

松本由理子（ちひろ美術館・東京　副館長）

「ちひろさんが絵本化したラモリスの映画『赤い風船』、50年ぶりに劇場公開できることになったんです」との電話が入ったのは３月のことだった。
「赤い風船」は、アルベール・ラモリスが1956年に作った36分の短編映画だ。パリの街並みを背景に、赤い風船と少年との交流を詩情豊かに描き、カンヌ国際映画祭パルム・ドール賞をはじめ数々の賞に輝いている。同年８月に日本でも公開されたが、ビデオで見ることはできても、劇場のスクリーンで見ることができない幻の名画だった。その作品が、このたびデジタル・リマスターして鮮やかに蘇り、７月下旬の東京を皮切りに順次全国展開するので、ちひろの絵本を劇場に置かせてほしいという。

東京館の秋の展示では、パリを描いた絵本作品として、『あかいふうせん』が展示される。ならばご一緒にと、宣伝面での協力へと話が広がっていった。

お盆のさなか、銀座の上映館に足を運ぶ。なつかしいメロディー、スクリーンいっぱいに広がった映像は、息をのむほど美しかった。映画が作られたのは1956年。第二次世界大戦が終わって10年ぐらいしか経っていない。舞台となったメニルモンタンは、パリの中心部を見下ろす丘の上にある。石畳の階段と古いアパルトマンのたたずまいは、ちひろが愛した戦前の名画「巴里祭」の冒頭シーンそのものだ。パリの街はもちろん、街行く人々やパスカル少年と風船の何気ない仕草、風船を追い詰める悪ガキ（？）たちすら魅力的だ。過剰な表現があふれる今、なんと清清しいことか。ちひろが心惹かれたのがよくわかる。

帰りぎわ、受付をのぞく。映画のカタログとともに、ちひろの絵本『あかいふうせん』が置かれていた。「大人気です。100冊も出ているんですよ」との言葉がうれしい。

●次回展示予定　12月3日(水)～1月31日(土)

ちひろ生誕90年記念展
ちひろと水墨

ちひろの絵は西洋で発達した水彩絵の具を主な画材としていますが、にじみや筆の勢いを用いた描法や、大胆な余白の生かし方、絵に対する考え方には日本の伝統的な絵画の影響が見られます。本展ではちひろの水彩画や絵本の原画を、水墨画とともに展示し、その表現との接点を探ります。

「あやめと少女」 1967年

ちひろ美術館コレクション展Ⅲ
絵のなかの音

歌や笑い声、雨や風の音、小鳥のさえずり……絵をみていると、さまざまな音が聞こえてきます。絵には、描かれているものをみるだけでなく、描かれていないものを想像する楽しみもあります。各国の絵本画家が描きだす「音」を、お楽しみください。

セイフ・エディーン・ロウタ（スーダン）「飛び込む猫」 1984年

東京館イベント予定

各イベントの予約･お問合わせは､ちひろ美術館･東京イベント係へ。
ちひろ美術館のＨＰからもお申込みできます。 http://www.chihiro.jp/event.html
TEL03－3995－0612　FAX03－3995－0680　E-mail chihiro@gol.com

●「茂田井武展」関連イベント

トーク「茂田井とコドモタチ」
及川賢治（100%ORANGE）×広松由希子（絵本家）

茂田井の大ファンでもある人気イラストレーターが、今に生きる茂田井の魅力を語ります。

○日　時：10月25日(土)
　　17：00～18：30
○場　所：図書室
○参加費：800円
○定　員：60名（要申込・定員になり次第締切）

茂田井武の〈こっそり〉画帳を囲む会（全４回）

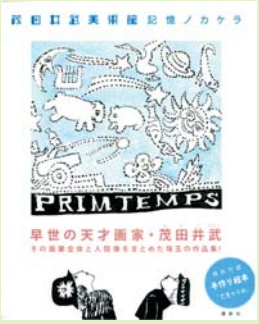
ケース展示では見られない貴重な画帳の全ページを、学芸員がめくって解説します。

○日　時：11月１日(土)　幼年の輝き－「幼年画集」と「シネマトグラフの影響」－
　　11月８日(土)　欧州の旅－「Parisの破片」と「古い旅の絵本」－
　　11月15日(土)　放浪の詩－「退屈画帳」と「無精画帳」－
　　11月29日(土)　お父さんの絵本－「アサノドウブツエン」と「巴里の子供」－
　　※各回17：15～18：15
○場　所：図書室
○参加費：各回500円
○定　員：各回20名（要申込・定員になり次第締切）

「古い旅の絵本」より　1943－44年

●新刊紹介
『茂田井武美術館　記憶ノカケラ』

茂田井武／著・絵、広松由希子／編
生誕100年を記念して、新資料や発掘作もあわせ、茂田井の画業の全体と人間像を紹介する待望の作品集が刊行されます。
寄稿文：奈良美智、おーなり由子、片山健、ささめやゆき、100%ORANGE、荒井良二、柴田元幸
発売日：2008年９月29日
定価：2,520円（税込）
発行：講談社



●お知らせ
いわさきちひろ　きせかえツール配信スタート

携帯電話専用サイト「きせかえモール」で、待ち受け画面やメニュー画面を簡単にカスタマイズできる、いわさきちひろのきせかえツールの配信がスタートしました。
※対応端末・詳細はこちらでご確認ください。
　http://kisekaemall.jp/
※有料のサービスとなります。

●ギャラリートーク

毎月第１・３土曜日14：00より展示室にて、作品の解説や展示のみどころなどをお話しします。10月15日(水)、11月19日(水）は松本猛（安曇野ちひろ美術館館長）がお話しします（参加自由)。

●えほんのじかん

毎月第２・４土曜日11：00より展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせなどを行います（参加自由)。
※授乳室もご利用になれます。

CONTENTS

〈展示紹介〉生誕100年 夢と記憶の画家　茂田井武展……❷❹　ちひろ・旅の絵本－ヨーロッパを訪ねて－……❸
〈活動報告〉なつ！こどもワークショップ開催／サントリー「水育」親子わくわく体験教室inお台場ワークショップ参加／「ちひろの絵であなたも一句」選句発表／東京女子医科大学病院でピエゾグラフ展スタート……❺❻
ひとことふたことみこと／美術館日記／窓…❼

美術館／友の会だより　No.160　発行2008年9月26日

ちひろ美術館・東京
〒177-0042　東京都練馬区下石神井4-7-2　テレホンガイド03-3995-0820 Tel.03-3995-0612 Fax 03-3995-0680
http://www.chihiro.jp/　E-mail:chihiro@gol.com